

継続的なまちづくり学習初年度の 高校生の進路選択と自己能力の認識

秋田 瑞樹¹・宇佐美 誠史²

¹非会員学生 岩手県立大学総合政策学部 (〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52)

E-mail:g041p001@s.iwate-pu.ac.jp

²正会員 岩手県立大学総合政策学部准教授 (〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52)

E-mail:s-usami@iwate-pu.ac.jp

教育現場において、地域人材の育成やキャリア形成を図ろうとして、若者のまちづくりへの参画を促進させている事例が多々見られる。「まちづくり学習」のような地域に着目した学習プログラムは、人材育成だけでなく、地域活性化や地域課題の解決に効果があると考えられる。本研究は、岩手県宮古市の宮古商業高校を対象として、著者らの「まちづくり学習」を3カ年受講してもらい、地域への関心が高まったか、自己成長を実感したかなどを把握し、進路選択との関連性を調査することで、まちづくり学習が高校生の進路選択にどのように影響するのかを分析する。本研究では、2019年度に行ったまちづくり学習についての生徒への意識調査と、今後の展望についてまとめる。

Key Words : high school student, community planning, career formation, self growth

1. はじめに

少子化による若年層の人口減少や、若者の都市部への流出を阻止するべく、子どもを対象としたまちづくり学習が全国的に展開している。まちづくり学習は、若者が地域に対して関心を持ち、主体的に参画していく人材となるよう育成するという意義がある。その大きな目的は地域活性化や、地域課題を解決することにある。また、まちづくり学習は地域社会と積極的に関わり合うことで、地域についての知識・関心を向上させるという特徴がある。東日本大震災以降は、復興まちづくりが促進された。震災直後はまちの復興が最優先であったが、現在では、まちの発展や人材育成にも重点が置かれている。岩手県教育委員会では、平成 31 年に「いわての復興教育プログラム第 3 版」を発行¹⁾し、「いきる」「かかわる」「そなえる」の 3 つの教育的価値を育てる試みを県内各地の学校で行っている。復興教育の概念が変化している中、まちづくり学習が持つ人材育成の可能性は非常に重要なものであると考える。

教育現場でまちづくり学習を行うことで、子どもたちの学びの場が学校という枠を超え、より広い視野に立つて考えることができるようになるだろう。では、進学か就職かに分かれはじめる高校生の段階でまちづくり学習を行うことは、高校生の進路選択にどのように影響するのだろうか。またまちづくり学習を受講した生徒の知

識・関心や自己能力に対する認識は、受講していない生徒と比べた場合どのような差があるのだろうか。

まちづくり学習に関しては、さまざまな視点、対象で研究がされている。高校生の「まち」に対する意識や他に対する意識の変化についての研究²⁾では、高校生への意識調査の中に進路に対する意識を問う項目がなく、将来的にどのように地域に関わっていきたいかという視点が見られない。高校の家庭科の授業を用いた研究³⁾では、高校生が地域に対し関心がないこと、関心があっても行動に移せない生徒がいることなどが示された。高校生の進路選択と地域学習の関連についての研究⁴⁾では、対象となった高校生が地域学習を受けたのは中学時代であり、地域学習の継続的な受講ではない。

このように、高校卒業まで継続的にまちづくり学習のような地域学習をし、その効果が高校生の進路選択にどのように影響しているのかを調査した研究は見られない。また、まちづくり学習を受講した生徒とそうでない生徒とを比較した研究も見られない。そこで、2016年度に岩手県の高校生を対象としたまちづくり学習の実践に関する研究⁵⁾では、まちづくり学習を受講した生徒のうち、地域志向や自己成長の実感が高くなった生徒ほど大学進学を志望していることが明らかにされた。

本研究では、さらにまちづくり学習と高校生の進路選択との関連を探っていく。そこで、東日本大震災の被災地であり、「いわての復興教育プログラム」の実践校で

もある岩手県立宮古商業高校にて、実際に高校1年生を対象に、卒業まで継続的にまちづくり学習を行い、進路選択や地域志向、自己成長の実感について調査を行う。特に、高校卒業後に高校生がどうなりたいのかを具体的に調査し、経年変化を追っていくことで、まちづくり学習が高校生の進路志望にどのように影響しているのかを明らかにする。

2. 高等学校でのまちづくり学習実践

岩手県宮古市内の宮古商業高校商業科および流通経済科の1年生(40名+29名=69名)を対象とし、2019年度7月から「ビジネス基礎」の授業を活用し、宮古市内のまちづくりにおける課題をいくつか取り上げて調査研究を行った。初回ガイダンスにて4つの大きなテーマ「公共交通の利用促進」「観光地への呼び込み」「商店街活性化」「若者を増やす」を示し、12グループがそれぞれ選択し、その後、個々に調査研究を始めた。その後、計7回授業(1回あたり50分@3コマ)を行い、資料収集、アンケート、現地調査、プレゼン資料作成についての解説と進捗状況のチェックを行った。

3. 受講生の進路選択や地域に対する意識調査

初回ガイダンス冒頭にて、まちづくり学習を受講する前の、高校生の地域や進路選択への意識を把握するため、アンケート兼学習ポートフォリオ(以下:ポートフォリオ)を実施した(表-1)。定期的にまちづくり学習の成果をポートフォリオとしてまとめることで、自己分析してもらい、過去の自分から変化があったか否かを明確に記入してもらう。こうすることで、進路志望や地域志向にまちづくり学習がどの程度影響しているのかを分析する。

第1回となる今回のポートフォリオでは、まちづくり学習を受講する前の現在の状況について質問した。

表-1 ポートフォリオの概要

調査名	「まちづくり学習」ポートフォリオ作成のお願い
調査・回収方法	まちづくり学習受講者にアンケート票配布、記入後その場で回収
調査日時	2019年7月17日
調査対象	まちづくり学習を受講する岩手県立宮古商業高校の商業科及び流通経済科の生徒
回収票	69人中69人
主な質問内容	①進路選択について(卒業後の進路、卒業後の居住地、進路選択で重視したこと等) ②地域やまちづくりに対する意識(地元に関する知識・関心、地元への好感度等) ③自己の資質・能力について(問題意識、情報収集能力、要約力、発信力、吸引力等)

現段階での進路志望や宮古市に関する知識・関心、自己の性格や資質・能力について率直に回答してもらい、このデータを、まちづくり学習を1年受講した後のポートフォリオと比較する。以下で、第1回ポートフォリオの集計結果を抜粋して紹介する。

・卒業後の進路

まちづくり学習受講前の商業科の生徒の卒業後の進路は、大学や専門学校への進学が合わせて62%、就職が36%である。流通経済科では、就職が58%であり、商業科とは真逆の結果となった。大学や専門学校を合わせた進学の割合は33%であった(図-1)。

・現在と卒業後の居住地

商業科の生徒の居住地域に関してほとんどが宮古市在住である(図-2)が、卒業後の居住意向(図-3)は宮古市は少ない。高等学校卒業後、約22%の生徒が県外へ居住予定ということがわかる。流通経済科の生徒の居住地に関しては、宮古市が最も多く、山田町という回答も多かった。卒業の居住意向は商業科と同様、宮古市という回答は少なく、県外への居住は45%であった。

・進路選択で重視したこと

卒業後の進路選択で重視したことに関しては、商業科では、「自分の能力を活かせること」と回答した生徒が最も多く、次いで「やりたいことができること」が多い。またこれらの生徒は次に「利便性が高い地域に住むこと」とも回答しており、地域貢献よりもむしろ自己に視点を置いた進路選択をしている傾向がある。流通経済科の生徒の進路選択で重視したことは、「自分の能力を活かせること」「やりたいことができること」の回答が最も多く、次いで「地域に貢献できること」の回答が多かった。商業科に比べ、地域への貢献を視野に入れた進路選択をしている傾向があることがわかった(図-4)。

卒業後の進路や居住地に関して、商業科と流通経済科で異なった特徴がみられた。商業科では卒業後に進学と回答した割合が高く、県外に居住する割合も高い。対して流通経済科の生徒は、公務員以外の就職と回答した割合が高く、宮古市周辺や盛岡市など、県内にとどまるという回答の割合が高い。さらに、進路選択の際に重視したことの項目では、商業科よりも流通経済科の方が地域貢献を視野に入れていることから、現段階では、流通経済科の方が地域志向が高いのではないかと考えられる。受講後の意識調査と比較することで、意識の変化の有無や、学科別の特徴、をさらに明らかにしていく。さらに、受講していない生徒とも比較し、まちづくり学習の効果を検証する。

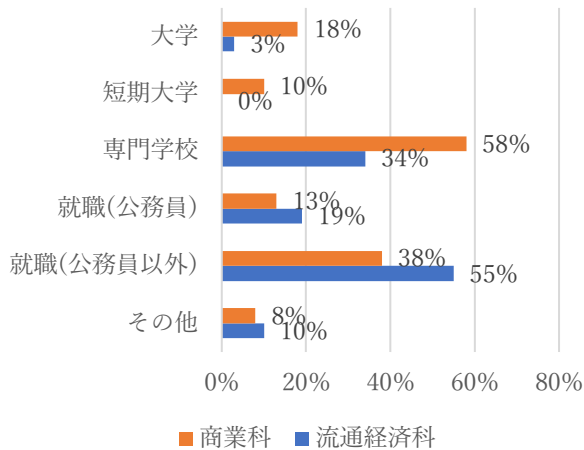


図-1 卒業後の進路

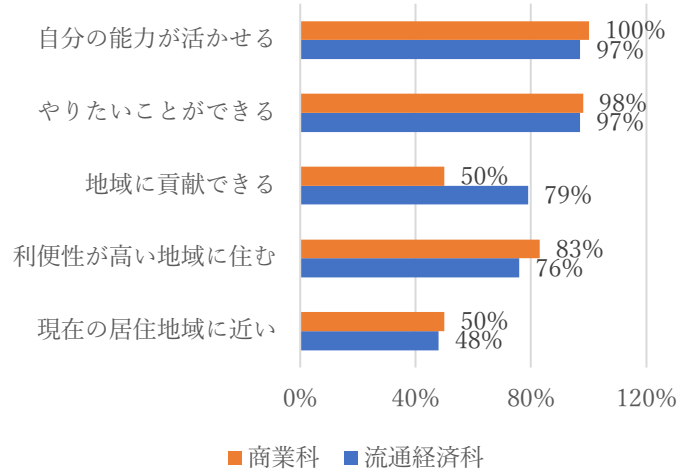


図-4 進路選択で重視すること

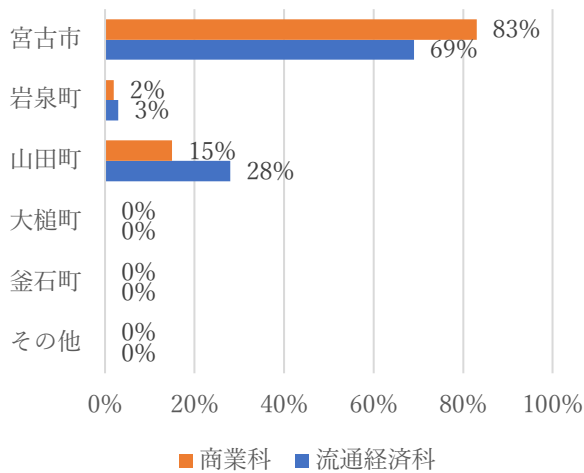


図-2 現在の居住地

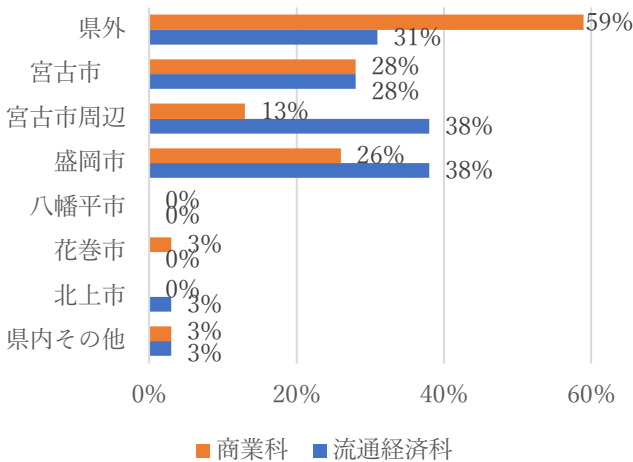


図-3 卒業後の居住地

4. 自己能力の認識

自己能力の認識に関して、項目全体で特徴的な傾向がみられた。(図-5)。

項目ごとに見ると、「身の周りの物事に対し問題意識を持てる」、「必要な情報を適切に収集できる」、「周りの意見や考えを積極的に聞くことができる」、「物事について深く考え、自分なりの見解を持つことができる」、の項目で、「そう思う」「ややそう思う」の前向きな回答の割合が5割以上であった。中でも「周りの意見や考えを積極的に聞くことができる」の項目で「そう思う」「ややそう思う」の回答の割合が高い。

一方、「自分の考えをわかりやすくまとめることができる」、「自分の考えを筋道を立てて相手に伝えることができる」、「率先してリーダーシップをとることができる」、の項目では「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答の割合が高く、特に「率先してリーダーシップをとることができる」の項目では「そう思わない」の回答が18%と高いことがわかる。

これらのことから、商業科と流通経済科の生徒は、「情報収集能力」や「傾聴力」、「思考力」に関しては得意としているが、「表現力」や「率先力」などは苦手としていることがわかった。特に「表現力」に関してはまちづくり学習においてとても重要であり、グループワークや現地調査の際に求められる能力である。これらの資質・能力に関しても受講後の意識調査と比較し、まちづくり学習を通して自己成長を実感できたか否かについて分析する。また、学科別の特徴についても分析し、次年度以降のまちづくり学習の参考とする。

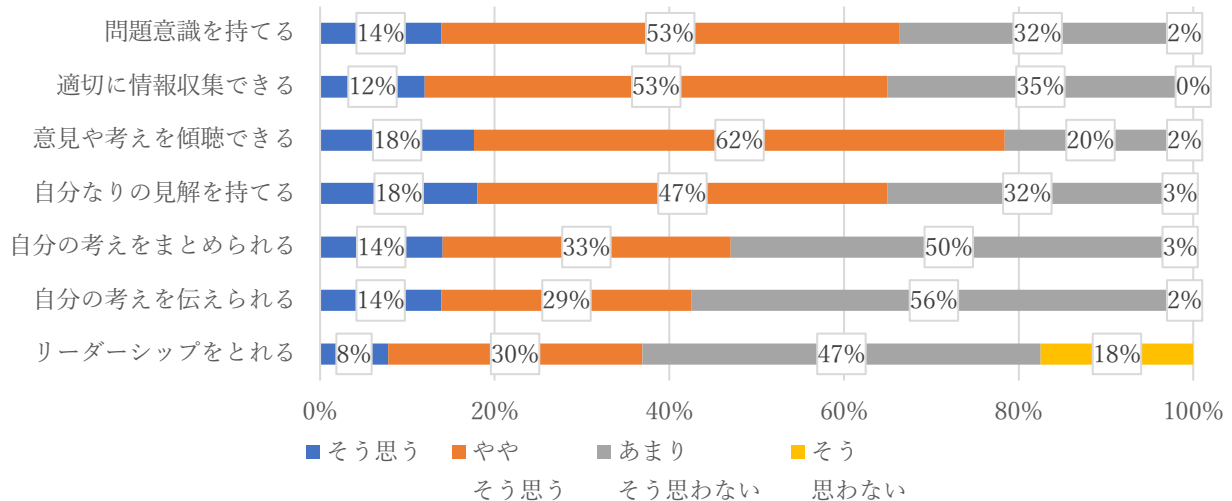


図-5 自己能力の認識

5. おわりに

本研究では、「まちづくり学習」と「進路選択」に着目し、まちづくり学習を受講した生徒の地域や進路選択に対する意識の変化を明らかにすること、そしてまちづくり学習を受講していない生徒も同時に意識調査することで、まちづくり学習の効果を明らかにすることが目的である。その前段階として、まちづくり学習受講前の生徒への意識調査をまとめた。結果として、進路選択は両方の学科で進学が最も多いこと、卒業後の居住地は、商業科の方が県外という回答が多いこと、自己能力の認識は、問題意識や情報収集能力、傾聴力の項目が、前向きな回答が多いことがわかった。今後はさらにまちづくり学習を継続し、年度ごとにポートフォリオを集積することで、本研究の目的を明らかにしていく。

2019年度のまちづくり学習を行う過程で、学科単位で知識や技能に差が生じる場面がみられることもあり、両方の学科が同等の水準で授業を受けられるための工夫が必要になる。それぞれの学科で今後どのような変化がみられるか、またどのような個人の生徒が、まちづくり学

習の効果を受けやすいのかなども調査し、真に効果的なまちづくり学習を実現することが求められる。

参考文献

- 1) 岩手県教育委員会「いわての復興教育」プログラム、第3版
https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_001/018/791/3.pdf
- 2) 陣内雄次, 大嶋悠也, 上田由美子: 高校生参画のまちづくりに関する一考察—栃木市「若者の居場所づくり事業」を事例に—, 宇都宮大学教育学部研究紀要, 第66号, 第1部, pp. 183-192, 2016
- 3) 城間若奈, 佐桑あずさ: 高校生の地域社会への参加意欲を高めるための授業実践, 日本家庭科教育学会大会, 例会, セミナー研究発表要旨集, pp. 88-89, 2017
- 4) 竹内裕一: 進路選択過程における地域学習の意味—千葉県三芳中学校卒業生の追跡調査を通して—, 新地理, 45巻, 3号, pp. 1-18, 1997
- 5) 宇佐美誠史, 秋田瑞樹, 高屋智未: 地域志向のキャリア教育を目指した高校生のまちづくり学習の試み, 第59回土木計画学研究発表会・講演集, pp. 207-212

(2020.3.8 受付)